

奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民投句

一般の部

奥の細道
むすびの地



令和四年六月度 入賞句一覽

投句数 四百六十四句

特選

名和 永山 選

青時雨裾を絡げつ大原女

愛知県瀬戸市 宮崎 諭志

季語「青時雨」は、生い茂った葉に溜まつていた雨粒がはらはらと落ちてくる様子を表す。また、六七月の通り雨をいう。この句から、鍵和田袖子（故「未来図」主宰）のへ大原や青葉しぐれに髪打たすゝを思い浮かべた。大原は京都北部の山裾。急な雨はいつものことのようにだ。中七「裾を絡げつ」からは、大原女の慌てぶりと艶やかさが浮かんでくる。「大原女」は、多くの人から愛される存在である。あの松尾芭蕉も、「妻にするならば官女より、働き者の大原女が良い」と言っている。大原女の働く姿の一節である。

新弟子のうすき胸板風青し

養老郡養老町 田中 紫香

季語は「風青し」で夏。青の付く季語は「青嵐」や「青東風」など、青葉若葉の頃の風である。また「青」を象徴する「未熟さ」「若さ」などの「青二才」「青年」なども想像される。揚げ句は「新弟子」のうすき胸板」と、相撲部屋の様子であるうか。先輩力士の大柄とは違い「胸板がまだうすい」「新米力士を詠んでいる。この句の季語「風青し」が、未熟さと同時に、これからどんどん成長していく新米力士への応援歌である。季語「風青し」が効果的である。

古すだれ外し隣家の近さかな

大垣市 佐竹 余史美

思わぬ発見というか、気づきが滑稽である。今まで簾が掛かっていて、隣を目にすることがなかったのだが、簾を外した途端隣の窓がすぐそばにある。ともすると、隣の家の中の様子までうかがえそうである。それほどどの近さを感じたのだ。「近さかな」の詠嘆による驚きがうまく表現されている。

秀逸

数珠玉の触れ心地良き立夏かな

大垣市 立川 昌子

若楓公墓と翁墓包むかに

岐阜市 堀江 美州

掛軸の絵柄かわりて夏近し

不破郡垂井町 大羽 志津子

高らかに矢車の音里の空

大垣市 西脇 克明

ねぶの花星は一粒つつ灯る

京都府京都市 部矢 祥子

椎若葉にはかに山の迫り来て

揖斐郡揖斐川町 栗野 みねお

少年の腕に擦り傷更衣

兵庫県神戸市 岸下 庄二

交番に出入りを許す夏燕

三重県四日市市 後藤 允孝

丸菓の指すり抜ける青時雨

大垣市 松岡 みつ

職を辞し写経する午後風薫る

本巢市 土川 楽人

入選

新緑の持ち上げてゐる遠伊吹

大垣市

酒井 和美

掬ひたる水も輝き新樹光

不破郡垂井町

川瀬 慶泉

尺八の渡りくる音や末草

不破郡垂井町

久保田 紘義

大泣きの児にプチトマト握らせり

東京都新宿区

花澤 ちいこ

黙々とバット振る子に若葉風

大垣市

北村 陽子

矢車や風呼び天へ大瓦

不破郡垂井町

小坂 久美子

夏近し伊吹の空の晴れゆきぬ

大垣市

辻 シゲ

沈丁花香の薄れゆく淋しさよ

愛知県額田郡

平松 京師

下呂プリン並び求める夏の空

養老郡養老町

山田 順子

そら豆のドレミファソラと茹であがる

兵庫県芦屋市

田原 和美

母の日は母を師として稽古海女

兵庫県芦屋市

田原 トミエ

亡き友のライン読み更け春惜しむ

大垣市

岡田 幸子

をちこちに卯の花多し古都の雨

神奈川県川崎市

立野 音思

そつぽむくマネキンの顔夏帽子

東京都足立区

山崎 董久

告げらるる息子の野心青嵐

大垣市

柴田 えり子

岬鼻の兜太の句碑へ卯月波

愛知県尾張旭市

小野 薫

春風や小さき背中にランドセル

岐阜市

浅野 郁子

喜雨来り濃尾平野の色冴える

瑞穂市

谷 牛歩

文机の歳時記めくる若葉風

岐阜市

辻 雅宏

宙に吊るきりんの餌や夏に入る

愛媛県松山市

平野 ヒサエ

選者吟

捨苗の大地をつかむ息吹かな

永山

一般の部

